

テーマ『人権の視点に立ったクラス集団づくりの在り方について』

常磐会短期大学 教授 しめだ しんいちろう ト田 真一郎さん



人権保育専門講座8は、3回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

連続講座1回めは、佛教大学の長瀬正子さんから、社会的養護の営みから「保護者支援」「子育て支援」について、保育のなかだけでは気づけない視点からお話しいただき、学ぶことができました。2回めはクラス集団づくりの在り方について考えていきます。ゲストスピーカーの保田維久子さん（豊中市立認定こども園 園長）からのお話を聞いた後、それぞれの保育現場での課題や取組について交流をおこない、最後には一人ひとりの「次の一歩」に向けて、「未来への種まきワーク」をしていきましょう。

1 日本の人権保育の特徴は「集団づくり」

人権保育の実践は、例えばアメリカでは違いが目に見える人種問題等に対して子どもたちがどう理解し、考え、行動していくのかというものから始まっています。しかし日本においては、もともとは同和保育からスタートしています。部落問題は子どもにとって目に見えない、理解しにくいものです。でもいつの間にか、差別的な価値観や偏ったものの見方を、子どもたちがもってしまうようになります。同和保育においては、子どもたちが部落問題と出合った時に、差別に気づきなくそうと行動する力の土台を、どうつくっていくのかを考えてきました。だからこそ普段の生活、クラスの集団の中で人権感覚を育てていくことを大事にしてきました。集団づくり、仲間づくりを日常の保育の中で大事にしてきたのが、日本の人権保育・同和保育の大きな特徴です。

日頃感じていることをグループワークで出し合っていただきたいと思います。日常の保育のなか、子どもたちの関係のなかで「ここにひっかかる」「ここが気になる」というところをもとにして、保育を組み立てていくことが、人権保育につながっているんだということをみなさんに感じてもらうことが大事だと思います。

【保育計画の組み立て】

①子ども理解 ②ねらい ③活動内容の決定 ④保育者のかかわりの決定

子どもの姿から「こうなってほしい」というねらいをもち、そのために「このような取組」をおこない、保育者は「こういうことを大事に」してかかわっていく。この流れが大切。

子どもの姿から出発した保育の流れの中で、人権の視点をきっちり位置づけていくことで、子どもたちが豊かな人権力をもつようになっていきます。

そういうことをふまえながら、ご自身の実践と結びつけて、保田さんの話を聞いてもらえればと思います。



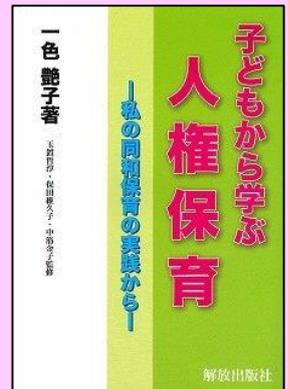
2 やすだいくこ 保田維久子さんのお話から

テーマ 『共に育ち合う保育実践』 子ども理解から仲間づくりへ ～遊びから学ぶということ～

【保田維久子さんの紹介】

豊中市の公立保育所で保育士として、また所長として勤務され、人権保育の実践を積み重ねてこられました。また、一色艶子さん著の「子どもから学ぶ人権保育」の監修や各地での講演活動など、人権保育の研究・研修においても活躍されておられます。

豊中市では2015年度からすべての保育所や幼稚園が、「こども園」という形になりました。昨年度から、もともとは幼稚園だったこども園で園長を務めておられ、「乳児がいない毎日にとまどっています、これまでの積み重ねは活かすことができます」と話されました。



尊敬する関係が作れるかどうか

みなさんは実践のなかでどんな悩みがありますか？乳児クラスでは、気もちを表せない子が、噛んだりひっかいたりトラブルになって、そのことから保護者どうしの関係が悪くなったり、友だちとの関係が切れてしまったりといったことも多いのではないのでしょうか。

1歳児だけの問題ではありません。保育者が「この子ちょっと怖い」「かかわったら厄介かも」という気もちをもってしまい、何もせずに放っておくと、そのまま大きくなって、4歳、5歳になっても関係性は変わらずにそのまま終わってしまいます。私自身、そのようなことが何度もあったし、今の園でも「取組を進めていかなければ」と感じています。何とかしようとして、「噛んだらダメよ」と1か月言い続けても、それではたぶん変わりません。そうすると、「今日もまたトラブルにならないかな」といった心配ばかりで、保育自体がおもしろくなくなってしまいます。



本来、保育は楽しいです。子どもたちと一緒にいて、子どもたちの育ちを実感できる、とてもいい仕事です。でもそうなるには手立てが必要で、その根底にあるのが人権保育で、「尊敬する関係がつかれるかどうか」ということだと思います。決してお説教や言い聞かせではなく、生活の中で関係性を変える、つくるということをしてほしいと思います。

つながっているごっこあそび

ごっこあそびの中で、どんなふうに保育をしていくのかということを考えていきたいと思います。3歳児の2つのクラスで「ネコごっこ」あそびがはやっていました。一方のクラスでは、自分が飼い主になって、ティッシュケースをネコに見立てて耳をつけ、ひもをつけて引っ張ってあそんでいます。もう一方のクラスでは、自分がネコになったつもりで「にゃんにゃん」といいながらあそんでいます。同じ3歳児でも、クラスで全然イメージが違うのです。

「ネコごっこ」をとおして子どもたちをつなげたいと思っても、どちらか一方のイメージをもう一方に押しつけても楽しくないのでうまく発展させられず、それが保育の悩みでした。一緒にあそんでいて、なんとなく仲良さそうにみえても、他の子のことを軽く見ていたり、「イヤだ」と思っていたりして、何も変わらないまま過ぎていってしまいます。お互いのあそびを認め合える、尊敬できるような関係に変えていかないと、クラスとしての関係は変わりません。そんな時にどうしたらいいのか、これからの話がヒントになればと思います。

ごっこあそびを、イメージの世界をつくったり広げたりするものと考えてみます。いきなり「2歳になったからお母さんになれる」「5歳になったからみんなで忍者ごっこが楽しめる」というものでしょうか。私は、ごっこあそびは積み重ね、つながっているものだと考えています。

最初は一人の楽しみです。0歳の子がスプーンを使って食べるまねを一人でずっとやって楽しんでいきます。それが発展して、「アーンして」などと言っておとなと食べさせ合いっこをするなど、おとなとイメージのやりとりをするようになります。そこで保育者が「〇〇ちゃんも同じようにしてるね」とつなげてやると、「〇〇ちゃん、いっしょにあそぼ」というふうに変ってきます。それから「自分がお母さんになっている」「自分がお店の人になっている」ということを出発点しながら、友だちとつながってあそぶようになっていきます。そして5歳児の最後には「共同の目的追及のためのあそび」というふうにつながっていくのがごっこ遊びであると考えてみましょう。



アイスブレイク

「かえるのうたが…」をうたいながら、両隣の人の中を交代でこすります。それをだんだん速くしていきます。懇談会などで円になっておこなうと、一体感が出て、なごやかに話ができるようになります。子どもたちとするときには、前後ですると面白いですが、なかなか立てない子もいると思うので、「座ったまま」でおこなうと、手が届かなかったりするので「どうやったらうまくいくか」と考えながらやることになります。いろいろな友だちのことを知り合ったり、楽しさを共感したり…。たくさん、いろんなあそびをしてほしいと思います。

「鏡の中のレイナちゃん」

○気持ちの上でなかまに入れていない…

1 2人の2歳児クラスに、1歳のときから登園しているレイナちゃん（仮名）という子がいました。レイナちゃんは0歳児の部屋にいて、ほとんど自分のクラスにいませんでした。呼びに行くと「くるな」というふうに拒否されました。他の子どもたちも「レイナちゃんは部屋になくて当然」と感じているような状態でした。

2歳という時期は、「一緒」というのが楽しくうれしい時期です。給食の時間なども友だちと「昨日テレビのアニメ、みたなあ」「なー」という会話を楽しんでいました。でもレイナちゃんは「なー」が言えません。きょとんとした顔で反応しないのです。それが4月からずっと積み重なってくると、みんなはレイナちゃんに「なー」を言わなくなります。みんなが話している横で、レイナちゃんは一人黙々と食べているのです。同じ場所にも、気持ちの上でなかまに入れていないことがすごくめだってきて、「この関係を変えないといけない」と考えていました。

その頃、他の子たちは、自分がお母さんになったつもりで、部屋にある人形やぬいぐるみをだっこして「よしよし」としていたり、キッチンコーナーで料理を作って、他の子や先生たちを呼んで一緒に食べたりして楽しんでいました。ほとんどの子がそのように遊んでいるなか、レイナちゃんは1人で0歳児の部屋にいてすごしていました。「レイナちゃん和其他の子は、楽しんでいることが全然違う」と感じ、レイナちゃんは何を楽しんでいるのか、周りの子は何を楽しんでいるのかを考えることが必要でした。



○ごっこ遊びの発展

ごっこあそびが0歳の時からどんなふうにつながっているのか考え、整理してみました。ごっこあそびはもっといろいろな世界があるし、たくさんの要素があると思うので、決してこれだけではないと思っています。

0歳：ごっこ遊びのおおもとは、0歳の時、母乳やミルクをもらう、離乳食が始まって食べさせてもらうなどという生活の中のいろいろな人とのかわりです。0歳児クラスの子どもの出発点は、まず「おとなと一緒に食事をして楽しい」などの経験を積み重ねることです。一番大切にしたいのは、「おとなが行為をまねすることで、子どもがそのまねをする」「おとながしぐさに声をかけて意味づけをすることで、子どもが『その行為は何をしているのか』を意識する」ということです。子どもがドーナツを食べるまねをしているときに、おとなが「ドーナツ食べてるの。おいしいね」と声をかけるとか、何も入っていないコップで乾杯をして「ジュースおいしいね」と声に出します。そのことで、子どもが“今、ジュース飲んでるんだ”等、自分のしていることを意識して、楽しめるようになります。おとなとのやり取りの中で、好きなおとなが共感してくれる、楽しんでくれるっていう気持ちの交流の中で、「うそっこ」が楽しめるようになり、本当に食べる活動から「あそび」に変わってきます。

1歳：「うそっこ」の「あそび」を、おとなともするし、子どもどうしてもするようになってきます。行為も、「料理をつくって相手にわたす」など、「食べる」「飲む」よりもう少し高度になってきます。おとなが言葉で意味づけする、「じょうずにできたね」などと共感する、この積み重ねで、何をしてあそんでいるのかが子ども自身の中で明確になってきます。1歳の終わりごろになると「積み木をつなげて電車にする」「おもちゃのなべをかきまぜて料理を作る」など、おとなのやっていることをまねて楽しみだす姿が出てきます。

2歳：「料理を作る」「赤ちゃんを寝かせる」などの子どもの動きに対して、「お母さんみたいね」「先生みたいね」という意味づけをすることによって、「つもり」から「役」になっていきます。役割意識をもてるようになります。

3歳：それぞれの役割意識がつながっていきます。一人ひとりの面白さやアイデアをおとなが伝えていくことで、「ごっこ」と「ごっこ」がつながり出します。

4歳：「お店屋さん」「おうち」など、状況が広がっていきます。そこで役割分担しながらあそび始めます。

5歳：時間や空間、必要なものを工夫するなど、あそびを構成していきます。友だちと協働するとか、イメージを共有しながらあそびをつくりあげていきます。



○友だちは、鏡の中の自分

家庭の状況から、家でおとなとのやりとりが少なかったり、共感してもらった経験が少なかったりしたレイナちゃん。おもちゃのプリンをおいしそうになめて見せているのは、鏡の中の自分でした。遊びのイメージが共有できていないので、他の子のあそびに勝手に入って行って、使っているおもちゃをとってしまうのでトラブルも多いのです。トラブルになると手が出るので、私は叱ります。レイナちゃんは、叱っている私を見るのではなくて、鏡に映っている、叱られている自分と私を見ていました。

友だちから声をかけられない、「なー」と言ってもらえないレイナちゃん。友だちとどうかわかっていいかわからない、どう共感していいかわからない、共感できるあそびがなかったレイナちゃんにとって、唯一の友だちは、鏡の中の自分だったのです。

○鏡の中から出てきた！

鏡の中にいるレイナちゃんを、何とか引き出したいと思って、いろいろなことをしましたが、出て来てはくれません。そこで私が鏡の中に入っていくことにしました。鏡の中では、変な顔を

して笑い合ったり、言葉あそびをしたり、いろいろなことをしてあそぶことができました。やっと、先生は共感してくれる人、先生とあそぶのが楽しい、と思ってくれて、少し変わってきました。「おとなと共感する」ということが、鏡の中でできるようになってきたのです。

ある日、いつものように鏡の前で私と二人であそんでいるときに、「何してんの？」と、他の子が私にかかわってきました。最初は、レイナちゃんは鏡の中でその様子を笑って見ていましたが、3回目ぐらいで、はじめてレイナちゃんがふり返って、じかに周りの子を見ました。「やっと鏡の中から出てきた」と実感しました。

レイナちゃんを周りの子とつなげていくために、「ネコごっこ」をしかけていきました。クラスのみんなが散歩に行くときに、よくネコと出あっていたので、イメージの共有がしやすいと考えたからです。ネコになってプリンを食べるあそびのなかで、レイナちゃんは友だちを見て、食べるまねができるようになっていきます。友だちも「レイナちゃんの食べ方、すごくおいしそう」と声をかけます。言葉があまり出ないレイナちゃんも、ネコ語での「にゃんにゃん」というやり取りは楽しくできました。どんどん、いろんな子が参加してできるあそびになっていきました。レイナちゃん以外の子のなかにも、実はまだまだあそびが発展していない子が何人もいたことがわかり、その子たちも含めて行為から「つもり」に、そして「役」へとあそびが発展していきました。

○子どものつながりが人権力に



その後、「うまくいっている」と思い込んで取り入れた、様々な設定でのあそびの中で、子どもたちのイメージの違いなどから失敗を重ねてしまいました。悩んでたくさんの試行錯誤を続けましたが、子どもたちの関係性は変わりませんでした。そこで、もう一度レイナちゃんが何を楽しんでいるのか、見つめることにしました。「保育者による言葉での意味づけをしっかりとやろう」というアドバイスももらいました。人形を抱っこして、無言で揺れているレイナちゃんに、「どうしたの？赤ちゃん、ねてるの？」

と話かけ、「寝かしてるの？」「熱があるなら、病院に連れていかないといけないね」などのやり取りを続けました。すると、「一緒に病院にいこう」と、つながってくる子が出てきました。周りの子が、レイナちゃんが何をしてあそんでいるのかわかったからです。

レイナちゃんが「私、こんなあそびをしているよ」と自信をもって発信することができていなかったんだ、ということに気がつきました。そこでレイナちゃんの「つもり」を意味づけして発信することを、保育者がおこないました。すると「レイナちゃんと一緒にあそんだら面白い」と認める子が出てきて、関係性が変わってきました。レイナちゃん自身も、周りの子が一緒にあそんでくれるようになったことで自信がつき、自分を少しずつ出せるようになってきました。

取組が3歳、4歳へと引き継がれるなかで、ごっこあそびも発展していきますが、生活経験が少ないレイナちゃんには分からないことが多く、なかなか友だちのイメージについていけないところがありました。そんなときに周りの子たちは、なかなか思いが言えないレイナちゃんに、「こうしたいの？」「こんなふうにする？」と聞いて、それを考えながら、一緒にあそぶことができるようになっていきました。こうしたことが、子どもの人権力につながっていくのだと感じました。

3 保田さんの話を聞いてト田さんから



○あそびの発達の流れを見通す

あそびは、このように発展していくからこそ、子どもたちをつなぐことができます。あそびの発達の流れを整理してとらえ、見通しをもって取り組むことが大切です。

○つながれない理由を読み取る

友だちとあそびが繋がらない、一人で遊んでいる、というときには、必ず理由があります。その理由をどう読み取るのか。その子のあそびの発達において、友だちとかかわる必然性がないときには、つながりません。でも、あそびが豊かになってくるとつながる必然性が出てきます。その子のあそびの世界を広げていくことを大事にします。

○日常の中に人権力を

「保田先生は豆が苦手だ」ということを園中の子どもが知っています。おとなでも苦手なことがあるということを知ってほしいから、保田先生がみんなに話しているのです。子どもたちが「できるからいい、できないからだめだ」と凝り固まっていくのか、「だれでも苦手なことはある」と理解していくのかでは、大きな違いがあります。そのように、日常の中に人権力につながるものが入っていることが大切です。

4 グループでの交流・共有と未来への種まきワーク

○グループワークによる交流と共有

- ①改めて課題と感じていることを考えることで、現在直面している課題を意識化する。
- ②他の参加者が感じている課題を共有することで、問題点を整理する。
- ③各現場での実践を交流することで、自園の取り組みに活かす。



○人権保育推進のための「次の一歩」を考える（未来への種まきワーク）

- ・ 困り感がある子の奥にある理由を考えて、かかわる。
- ・ 言葉で表すことを求めすぎないで、気持ち伝わる体験を重ねていく。
- ・ すごく分かりやすいので、ごっこあそびの発展について園で共有して、子ども理解につなげる。
- ・ 子どものあそびの発達を見極めて、どのようなあそびをするか、どの子とつなぐか共有する。
- ・ うまく伝えられずに困っている子のイメージを言葉にして、発信を手伝っていく。
- ・ 自分の価値観や決めつけに気づけるように、職員とたくさん話す。



5 参加者アンケートより

○「ごっこあそび」を書面に書き出すことで、子どもの発達が今どこにあるかが一目で分かり、子ども理解につながっていくと感じました。ワークショップでは、他園の先生方の子どもの見方や課題にふれることで、生活のしにくさのある子への援助の仕方やその意味を確認することができました。人とかわり、あそびを豊かにしたいと思います。



○ごっこあそびも、整理すると、とても分かりやすいことが判明しました。年齢別でみると気になる子とまわりの子のちがいが（共通のもの）も見えてくるので、やっていきたいなと思いました。

○言葉にして子どもたちをつなげていくことを保育士が見極めながら、つながりづくりをしていきたいです。そのためにも、子どもたちの姿をじっくり見ていきたいと思いました。

○自分自身実践をしていて、「よし、がんばった、子どもが繋がった」と思ってしまうこともあるけれど、自己満足をしてしまうのではなく、本当にそうかな、どんな思いでいるかなと、丁寧にみていきたいと思います。レイナちゃんの話、とても印象的でした。一朝一夕でなく、日々積み重ねていくことで、仲間を少しずつつくっていけるよう、安心できる場ができるよう、生かしていきたいです。

○あそびの展開や発展について悩むことが多かったです。自分自身が、あそびの広がりについて知らなかったのだと気づくことができたので、あそびをたくさん知り、楽しんでいきたいと思います。

○グループワークをとおし、仲間づくりの課題を出し合ったことで、共感できる内容や「そんなことがあるんや」という気づきになる内容があり、学びとなりました。友だちとうまくかわれられない子どもが多いなか、気になる姿ばかりを追っていましたが、「うまくかわっている子はどうしているんだろう？」と目を向けることが大切だと学びました。

